総合的な学習の時間における国際理解教育の在り方

── 中学部における現地校との授業交流を通した現地理解教育の実践 ──

前台北日本人学校　教諭
三重県松阪市立飯高東中学校　教諭　池　畑　直　哉

キーワード：現地理解教育，現地校との交流，総合的な学習の時間

１．はじめに

(1) 学校規模

沖縄県与那国島のすぐ近くにある台湾。その中心都市，台北市は人口約260万の近代都市である。日本人学校はその中心部から約12km北に位置する天母という街にある。天母はもともとのどかな田園地帯であったが，日本人学校，アメリカンスクールが設置されると，そこに子どもを通わせる外国人が多く住み着くようになり発展した。今では日本語，英語，中国語の飛び交う，国際色豊かな街になっている。日本人学校は，その天母の中心，中山北路と天母路が交差した場所にある。

平成19年度は，小学部18学級，中学部６学級，児童・生徒数は732名（20年２月現在），職員は，派遣教員，現地採用職員，用務員，警備等含めて58名で，日本人学校の中では大規模校である。

(2) 特色ある教育活動

台北日本人学校の特色ある教育活動として，総合的な学習の時間を使っての「中国語」,「英語活動（英会話）」,「現地校との交流活動」を挙げることができる（低学年においては,「中国語」,「英語活動」については，学校裁量の時間で,「交流活動」については生活科で行っている）。

さらに，平成17年度からは小学部３年以上に選択語学の時間を新設した。選択語学は，台北日本人学校での語学教育を推進する中で，英語に力を入れてほしいという声と中国語を充実させてほしいという要望を両立させる意味で新設されたものである。中学部では選択教科の一つとして，また，小学部３年生以上の学年では学校裁量の時間を１時間増やし，他の教科とのバランスを考えながら新設した。

(3) 現地校との交流会について

交流活動は，現地校との交流を軸に現地理解教育を行っているものである。交流会は，決まった現地校と１年おきにそれぞれの学校を招待するという形で行ってきた。例えば，今年度日本人学校の１年生が現地校を招待したなら，来年度は日本人学校の１年生は招待されるというやり方である。この活動はおよそ20年の歴史があり，現地校との恒例行事となっている。日頃学習した中国語を試す場であり，台湾への興味・関心を高めたり，台湾についての理解を深めたりする場でもあるので，重要な役割を担っている行事である。

平成18年度より，小学部の３年生以上において，お互いの学校の実際の授業を受けるという一日交換留学を始めた。現地校ということで，授業一つをあげても，教師の授業の進め方や生徒の授業の受け方，意識は日本の学校とはやや違うところもある。そのような違いに戸惑う生徒の姿も見られたが，授業に参加することで，積極的に中国

語を使ったり，現地校の生徒とコミュニケーションを図ろうとする姿も見られるようになってきたことは一つの成果であると考える。

２．交流活動の実際

(1) 一日交換留学について

「現地校との交流を通して，互いの気持ちや文化，習慣などを進んで理解し合おうとする態度を養い，国際性の育成を図る」ということを中学部の現地校との交流会活動のねらいとし，中学部第１学年と第２学年において一日交換留学を実施している。

交流活動を進める天母國民中學校（以下，天母國中）は，生徒数2000名を越える大規模校である。これに対して，台北日本人学校中学部は各学年２クラスであるため，天母國中の第１・２学年より２クラスを選出し，一日交換留学を実施している。

先にも述べたように，この一日交換留学は各クラスの半分の生徒がお互いの学校の授業を受け，昼食や休み時間をともにするという方法で実施している。台北日本人学校のクラスの分け方は，名簿番号の奇数偶数により分けてはいるが，中国語が話せる生徒の数を配慮しながら分けるようにしている。

(2) 一日交換留学の実際（昨年度の一日交換留学より）

① 日　　程　2007年12月４日（名簿番号が偶数の生徒→天母國中へ）
　　５日（名簿番号が奇数の生徒→天母國中へ）

② 交流学年　台北日本人学校　　中１：77名（２学級），中２：58名（２学級）
　　天母國民中學校　　中１：72名（２学級），中２：74名（２学級）

③ 交流方法　両校各クラスに18～20名の受け入れで実施。２日とも同じ日程。

《天母國民中學校》	１校時	２校時	３校時	４校時	昼	５校時	６校時	放課後
台北日本人学校生徒	普通授業		移動	授業	昼食、昼寝	授業	授業	移動
天母國民中學校生徒	普通授業							

《台北日本人学校》	１校時	２校時	３校時	４校時	昼	５校時	６校時	放課後
台北日本人学校生徒	普通授業		学活	授業	昼食・清掃	授業	学活	
天母國民中學校生徒	普通授業		移動				移動	

(3) 交流の様子

通常の学校生活を体験する交流活動は３年目，生徒の半数が入れ替わる交換留学は２年目であった。昨年度は天母國中より「ペアを決めて活動してはどうか」との提案があり，２日間同じ生徒とペアで活動をするようにした。校舎を案内したり，授業では隣の席に座り，互いの学習内容を説明したりと交流を深めることができた。

① 天母國中での交流の様子

各クラスへ14～20名の日本人学校生徒が入り，授業を受けた。交換留学は一昨年に引き続き体験している生徒が多く，関わり方をそれぞれ工夫していた。天母國中の通常の授業や，昼食，昼寝なども体験することができた。

また，昨年は初めて保護者ボランティアに協力していただき，通訳ばかりでなく活動全体の大きな助けとなった。天母國中は生徒数が2000名を超える大規模校なので，日本人学校の生徒はその大きさに驚いていた。授業の

内容も，生物ではVTRを使用したり，数学ではパズルを解いたり，体育ではさまざまな配慮をしていただいりした。

② 台北日本人学校での交流の様子

各学年２クラスへそれぞれ18～20名の生徒が入り，授業を受けた。一昨年同様，天母國中の保護者ボランティアの方数名に通訳をしていただいた。５教科と技能教科で特別時間割を組み，それぞれの授業の中で，自己紹介，実験，テーマの話し合い，実技などの活動を行った。昼休みは校庭でサッカー，バスケットボール，バレーボールなどを通して一緒に遊ぶ姿が見られた。一昨年は日本人学校と天母國中の生徒が別々に好きなことをして過ごしていたので，ペアを組んだことの効果がここにも現れていた。それぞれの得意なスポーツの違いを実感したり，中国語ができる生徒は学校生活について話したりして異文化理解を深めていた。

(4) 生徒の感想

○はじめは，「何だ～。交流会かぁ。」という気持ちで天母國中の方々を出迎えていました。（中略）一日目は少しきまずい様子でした。二日目はペアの子がやさしく出迎えてくれました。私も楽しみにしていました。昨日よりもわくわくしていて一日中楽しかったです。今までの交流会とは違って楽しかったです。（中１）

○二日間，中国語の中に入ってみて，苦労することが多かったです。でも，逆に中国語で話して返事がもらえるとガッツポーズをしたくなるほどうれしかったです。（中１）

○楽しかった。中国語はあまり得意じゃなかったけれど，必死のジェスチャーがやっと通じたときはすごく嬉しかったです。また，天母國中では先生の言っていることが全然わからなかったけど，ペアのウェンちゃんがジェスチャーや英語で一生懸命教えてくれました。とても仲良くなれました。また会いにいきたいなぁ！（中２）

○「ああ，もっと中国語が話せれば」，と改めて思いました。でも，「伝えたい」という思いがちゃんとあれば相手にしっかりと伝わるということを感じ取れました。もっと中国語を勉強するぞー！（中２）

(5) 一日交換留学後の交流

これまで，交流活動は実施するものの，その後の交流はまったくなかった。しかし，昨年の一日交換留学で，天母國中の生徒が日本人学校の生徒を文化祭に招待したいという話が出た。招待された生徒たちは２日間の一日交換留学の感想を掲示物として作成し，天母國中の文化祭に出向き，交流クラスに贈った。また，当日は天母國中の生徒だけでなく，学年職員や校長先生も温かく迎えてくれた。生徒同士，校内を見学するなど，有意義な文化祭訪問となった。生徒の現地校との交流活動に対する関心・意欲の広がり，深まりを感じた。

さらに，日本人学校の職員研修（現地理解）において，天母國中と職員間の交流も行われた。職員研修での現地校訪問は，その相手校は毎年変わっているが，生徒同様に同じ学校（天母國中）との交流を継続していくことで，生徒間の交流から学校間の交流へと深まっていくのではないかと考える。

３．成果と課題

交換留学の前は，「またか」「やらなくてもいい」などの生徒の声も聞かれたが，交換留学が終わってみると「楽しかった」「来年も楽しみ」という感想が多く聞かれた。生徒たち自身もなぜそう思うのかよく分からない様子だったが，おそらく異文化に対する不安，現地校の生徒とうまく人間関係を築くことに対して自信のない気持ちが「やらなくてもいい」という言葉になって表現されていたのではないかと考えられる。

しかし，実際に訪問したり，迎えてみたりすると，「言葉がわからなくても通じ合った」という体験を通して，安心感や自信を持ち，「皆友好的でとてもいい人だ」「いろいろな違いをさがしていきたい」「もっと中国語や英語を勉強して会話をしたい」という気持ちに変わっていく。とくに昨年は天母國中の提案でペアを決めたことから，生徒たちは「誰と何をするのか」という具体的な行動について見通しを持ち，より安心して行動することができた。同じ現地校と継続して交流することで，相手側の観察や考え方に耳を傾け，共に交流活動を作り上げていくというメリットが得られることがわかる。

一昨年の課題であった日本人学校からの引率人員の配置については，昨年度，保護者ボランティアに協力していただき，学部主任が同行することで，生徒指導についても，通訳と授業の補欠の対策についても改善が見られた。

今後の中学部の交流活動の課題は，発達段階を考慮した交流のあり方の工夫である。初めて現地の学校生活を体験するという新鮮な驚きも大切だが，小学部から本校に在籍している生徒にとっては，例年のマンネリ化した行事になる可能性があり，本来の国際交流の目的を生徒も教員も見失っていくことになりかねない。また，年一回の交流では従来の交流会と同じようにイベント的なもので終わってしまい，一日交換留学が当初目指した日常的な交流の実現は難しい。天母國中では学校のホームページで日本人学校との交流を大きく取り上げていた。時間的な制約の中で，インターネットや情報機器の活用による日常的な交流活動の継続も検討することが必要だと考える。